

## 論文審査の結果の要旨

氏名 市川 桃子

本論は、植物描写の分析を通し、中国古典詩を研究するための新たな視点を探求したものである。第一部は、先秦から唐代までの詩において、ハスの花を表現するために、「芙蓉」「蓮花」「荷花」「菡萏」「藕花」という五つの語が使われていることに着目し、それぞれの用法の違いを考察した。その方法は、データ・ベースを駆使してそれぞれの用例を洗い出し、その用法を比喻・実景・宗教関係などに分類した後、時代別の用法の特徴・歴史的变化・詩人別の特徴を考察するというものである。資料の検索が容易になった今日、このような研究で重要なのは、まず何よりも膨大な用例を正確に読解することである。市川氏はこの困難な作業をなし遂げ、多くの興味深い事実を見出した。一例を挙げれば、「蓮花」は漢代においてハスの花全般を指すものだったが、仏典の翻訳に使用されたため、唐代には仏教と結びついた語となったこと、「荷花」は『詩経』から用いられていたが、漢魏六朝には、「芙蓉」「蓮花」が一般的となり、六朝後期に再び現れたときは、一面にハスの咲く池のように、風景描写に用いられるものとなったことなどである。このように類似した五つの詩語を網羅的・包括的に比較分析した研究はこれまでに例がなく、多くの有意義な事実を発見した点で、その価値は極めて大きい。

第二部第一章はハスを描いた詩を材料に、美意識の変遷を考察した。ハスは美女の喩えに用いられるように、美しく目出度い植物であったが、六朝後期より衰残のハスを描くことが始まり、中晩唐に「荷衰え芙蓉死す」という語に代表される新たな美意識が成立したことを、多くの作品を分析して論証した。第二章は桜桃を描いた唐代の詩を比較し、中唐に大きな変化が起こったことを指摘した。この二つの研究は、主題を同じくする詩を通時的に概観し、変化の意味を考察するという手法において、また中唐が中国文学史上重要な時代であることを指摘した点で、大きな意義を持つものである。

第三部は、ハスの実を採る歌「採蓮曲」に関する多面的な研究である。第一章は「採蓮曲」の成立について、その詩形・用語・主題を先行する歌曲と詳細に比較し、従来の説を覆す新たな見解を提出した。第二章では、従来解釈が分かれていた李白「採蓮曲」の末尾について、新たな解釈を示した。第三章は、李白の「採蓮曲」が、一九世紀、フランス・ドイツの詩人たちによって翻訳され、グスタフ・マーラーの「大地の歌」に取り入れられるまでを、多くの資料を示して論述した。そして「採蓮曲」を詠った李白の精神は、時間と文化の違いを超えてマーラーの作品にも継承されていることを論じた。

以上のように本論では、中国古典詩の研究に対し様々な手法が試みられ、いずれも大きな成果をあげている。第一部において、詩人別の特徴に対しては比較分析が不十分であることなど、今後の課題も残されているが、中国古典文学の研究を大きく前進させる成果であることは間違いない。よって本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。